

## 凡例

1. 本書で用いている補瀉法は、明代・陳会の著書『神応経』の捻転補瀉法を遵守している。具体的な方法は、補法はまず、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら連続して3～5分間、あるいは5～10分間捻転補法を施した後に抜鍼する。補法では置鍼を行わない。瀉法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら置鍼する。置鍼の時間は、一般的に20～30分間とする。置鍼の間、5～10分間ごとに0.5～1分間（または2～3分）捻転瀉法を施す。このようにすると、置鍼の間に2～4回捻転瀉法を施すことになる。最後の捻転瀉法を施した後は3～5分間置鍼をし、鍼感が消失してから抜鍼する。まず瀉法を行ってその後に補法（先瀉後補法）を施す場合は、鍼感が生じてから1～2分間捻転瀉法を施し、10～15分間置鍼する。その後、連続して3～5分間捻転補法を施し、すぐに抜鍼する。捻転補瀉の時間の長さ・角度・頻度は、具体的な病状や患者の感受性によって決定する。一般的に、患部取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法はともに少なくしたほうがよい。循経取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法ともに多くしたほうがよい。弁証取穴の場合は、捻転補法・捻転瀉法はさらに多くしたほうがよい。補と瀉の量の対比では、捻転補法の時間は長いほうがよく、量は軽いほうがよい。捻転瀉法の時間は短いほうがよく、量は強いほうがよい。

本文中の（補）と（瀉）は、刺鍼の補法と瀉法を意味する。また（灸補）と（灸瀉）は、施灸の補法と瀉法のことである。これらの（ ）付きの文字および（点刺出血）（透天涼）などの（ ）付きの文字は、その前に列記された複数の経穴名の全部にかかり、それらの経穴に対して同じ手法を施すことを示している。

2. 本書で使用している「焼山火」と「透天涼」の手法は、明代・除鳳が『鍼灸大全』金鍼賦で述べているような複雑なものではない。本書の焼山火の手法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら拇指と示指の2指を補の方向に捻転し、その後鍼柄をきつく捻り（局所の筋肉が緊張するようにして、鍼が深く入るのを防ぐ）、下に向けて適度に按压をかけ、徐々に熱感を生じさせるというものである。透天涼の手法は、施術者が判断した目的の深さまで刺入し、鍼感が生じたら拇指と示指の2指を瀉の方向に捻転し、その後鍼柄をきつく捻り（局所の筋肉が緊張するようにして、鍼が抜けるのを防ぐ）、上に向けて適度に提鍼し、徐々に涼感を生じさせるというものである。この操作方法は、比較的簡単に把握しやすい。

3. 本文中に「補法を用い焼山火を併用する」あるいは（補、焼山火）とある場合は、捻転補瀉法の補法を行い、その後に焼山火を併用するということであり、これにより温補の作用を得ることができる。「瀉法を用い透天涼を併用する」あるいは（瀉、透天涼）とある場合は、捻転補瀉法の瀉法を行い、その後に透天涼を併用するということであり、これにより熱邪を清

散させる作用を得ることができる。

4. 『常用腧穴臨床發揮』（日本語版『中医鍼灸 臨床経穴学』）、『鍼灸臨床弁証論治』（日本語版『中医鍼灸 臨床發揮』）の両書で論じている、経穴の配穴後の効能・協同作用および某方剤に相当あるいは類似する効果が、本書で述べている内容と一致しない場合は、本書を基準とする。

5. 本書の鍼灸処方が中薬の方剤に相当するというのは、方剤の総合的な効果に相当する、または類似しているということであり、単味の薬材の分析と各経穴の対応関係を指すものではない。

6. 【臨床応用】に示してある病および証名には、検索しやすいように【主治病証】において下線を付してある。

7. 【歌括】のなかの主治病・証は、【主治病証】のうち代表的な病証を抜粋したものである。

8. われわれが1948年以前に使用していた鍼は自家製鍼であり、現在の25・24号の毫鍼に相当する。1949年以降は、一般的に市販されている26号の毫鍼を使用しており、ここ数年は28号の毫鍼を使用することもある。